

# 生徒の理解を促進し学習意欲を高める 体系的な文法指導

松井 四郎

## 1. はじめに

コミュニケーション重視の英語教育の中で、文法指導が話題の中心になることはほとんどない。どの英語教育関係の専門書や雑誌を読んでも、最近は言語使用・言語活動に関する記述が目立つ。「文法」という名の授業も、そのための検定教科書も存在しない状況では、それも当然の結果だと言える。しかし、授業の名前が何であれ、相当数の高校が独立した文法の授業を今でも行っているのは周知の事実であり、それならば、効率のよい文法の教え方・学び方がもっと議論されてしかるべきである。

2008年に行われたベネッセの調査によると、中学生の実に8割が「文法がわからない」と答えている。それにもかかわらず中学の教科書は会話中心で、生徒は文法がわからないままにされてしまう。文法の質問をしたら「やらなくていい」と教師に言われたという話さえ耳にする。ことばには規則性があるということも理解していない生徒が多数入学してくるのだから、高校1年の授業を担当するのは正直頭が痛い。整序問題にそのまま使えそうな、あり得ない語順で単語を並べてしまうのも日常茶飯事。「主語になるのは名詞」「助動詞の後は動詞の原形」「前置詞の後は名詞」といった初歩の初歩から教えなくては授業が成立しない。コミュニケーション重視の英語になってから、中高生の英語力は下がり続けているという指摘もある(寺島, 2009)。ゆとり教育の見直しと同様、英語教育の在り方も再検討すべき時期が来ている気がしてならない。

## 2. 初期段階で必要な規則に関する意識的な学習

文法の知識がなくても英語力を高められるのならそれでも一向に構わないが、長年現場で教えていると、そのような例がほとんどないことは経験からわかる。アメリカやイギリスで開発された、言語活動に焦点を当てた教授法が今までにいくつも紹介され

た。その中で定着したと言えるものがどれだけあるだろうか。勉強を怠らない熱心な英語教師、実用的な英語力を習得するため日々努力している生徒はいくらでもいる。それでも、文法の参考書が無くなったり、高校で文法の授業が行われなくなったりする気配が見られないのは、英語圏で採用されている方法が必ずしも日本人に適しているわけではないと判断する人が多いからに他ならない。英語が日常レベルで使われていない日本の言語環境、英語と日本語の言語的な距離、大学入試という要因を考慮すれば、最終的な到達目標が何であれ、規則に関する意識的な学習が初期段階ではどうしても欠かせない。

言語使用が強調されるほど、生徒の「規則を学ぶ」という意識は希薄になっていく。現在の英語教育は、「コミュニケーション能力の育成」を重視する方針をとっているが、単語力・文法力が明らかに不足している生徒に言語活動をさせても、機能する道理がない。本来実用力の向上を目指したはずの訓練が、自分が何をしているのかもわからないまま発話を繰り返す作業になり、結果として英語嫌いを増やしてしまっている。生徒をよく観察してほしい。彼らの多くは、知識を活用できないのではなく、英語の基本的な規則も知らないからそもそも使いようがないのが現状だということを。内容を重視する次の段階へ進むためにこそ、英語という言語の基本的な仕組みを理解する力が必要となる。以下、現在の指導法に対して多少の改善点を提案したい。

第1に、中学では規則を意識的に学習する比重を今よりも高める。現在の高校1年生は、本来中学で身につけるはずの文法が定着していない場合が非常に多く、やり直しのために相当な時間を取られてしまっている。英語学習の初期段階で規則を学習することに対して否定的なイメージを持つと、その姿勢が高校になっても持続し、後は丸暗記しては忘れるの悪循環。幼児と違い、中高生の年齢では、無意識

のうちに言語の規則を習得するのは極めて難しい。

第2に、高校では文法をもっと体系的に指導する。検定教科書の文法の箇所は言うまでもなく参考書も、本来関連があり系統立って教えらるべき項目をバラバラに扱い過ぎている。項目間のつながりを理解できれば、必然的に応用力も高まる。現状を見れば明らかのように、暗記に頼った学習では、生徒はすぐに行きづまってしまう。本稿では、少し工夫すればわかりやすく説明できるのに、参考書では決まり文句として訳しか載っていないことの多い表現の教え方に焦点を当てる。

### 3. 中学レベルの知識で複雑な表現を説明する

言語を学ぶ場合、「理解」と「暗記」の両方が欠かせない。難しいのはそのバランスだが、学習者の理解力や言語環境など様々な要因に左右されるため、見極めは難しい。私は以下の2つの基準を満たせば、暗記よりも理屈で割り切るように指導している。

第1に、汎用性があること。いくらわかりやすい説明でも、特定の表現に対してしか使えないのなら、時間を掛けて学習する意味があるとは言えない。

第2に、簡単な規則の組み合わせですむこと。「仮定法」のように、直説法との形式上の区別が日本語になく、概念の理解自体が難解な項目は時間をかける以外にないだろう。しかし、中学生でも扱える程度の規則を多少応用するだけで説明できる大学受験レベルの表現も決して少なくない。以下はそのような表現を題材にした指導例である。ただし、次に挙げる程度の初歩的な規則を、生徒は理解しているものとして話を進める。

- ・主節・従属節・主語・補語・目的語という用語とその意味
- ・名詞の働き(主語・補語・目的語になる)
- ・形容詞の働き(名詞を修飾するか補語になる)
- ・副詞の働き(名詞以外を修飾する)

文法指導を否定的にとらえている教師や研究者は多いが、その人たちはこの程度の規則を教えることにも反対なのだろうか。もしそうなら、英語をどのように教えるのか、私には想像もできない。

#### 例1 The 比較級 SV ～, the 比較級 SV ～.

どの文法書・参考書を見ても、「The 比較級 SV ～, the 比較級 SV ～.」には「～すれば、ますます～」

という記述しかない。単語や文脈から文の内容は推測可能だと考える人が多いのだろうか。しかし、この構文を含む英文を生徒に読ませても、整序問題などで英文を作らせても、正答率は極めて低い。生徒にとって難解な「The 比較級 SV ～, the 比較級 SV ～.」も簡単な規則を使ってきれいに説明ができる。

この表現で第1に気をつけるのは、前半が従属節、後半が主節という構造になること。主節と従属節がカンマでつながれている点では例外だと言える。習い始めに The sooner, the better. のような、省略を含む例を学ぶため、多くの学習者が前半も後半も SV を含む文の形になるという基本事項さえ知らない。

次に重要なのが、比較級があるのは形容詞と副詞だということ。この特徴に着目し、以下のような5つのパターンを設定すれば、この表現をほとんどカバーできる。パターン1と2は比較級が形容詞、パターン3から5は副詞の場合である。この表現の中の the は一体何なのか疑問に思う生徒もいるだろう。前半の the は関係副詞、後半は指示副詞と分類するのが一般的であるが、それを知らなければ理解の妨げになるわけでもなく、逆に混乱させてしまうので「the の特殊な使い方」という程度の説明で十分。詳細に立ち入る必要はない。では、それぞれのパターンを見ていく(英文の中で下線部がそれぞれのパターンに該当する例)。

#### パターン1 比較級が形容詞で補語になる

- (1) The older I get, the happier I am.
- (2) The fresher the fish is, the better it tastes.

(1)(2)では形容詞(older と fresher)が SVC の C になっている。理論的にはこの形容詞の比較級が SVOC の C になることもあるはずだが、複雑になり過ぎてわかりにくくなるせいか、文法書を見ても節が第5文型の例はまず載っていない。誤用が多いのがこのパターンの特徴。補語になる形容詞は文頭に移動しなければならない。用例辞典では、(3)のような文は通常誤用とされている。

- (3) \*The more I get old, the more I am happy.

最近では、検定教科書でも(3)のような英文をときどき見かけるようになった。これを正しい形(または許容範囲)と教えると、生徒は勝手に一般化して使う

ようになってしまう。基礎固めの段階では、誤用として教えるべきである。

### パターン2 比較級が形容詞で名詞を修飾する

- (4) The more money he makes, the more useless things he buys.
- (5) The more girls you are interested in, the less you can concentrate on study.

形容詞が名詞を修飾する場合(例えば, He took many pictures. の下線部), 「形容詞+名詞」のまとまりは名詞の働きをするから, 主語・補語・目的語のいずれかになる。(4)(5)では「形容詞+名詞(more money と more girls)」のまとまりがそれぞれ節の中で, 他動詞の目的語・前置詞の目的語になっている。

### パターン3 比較級が副詞で動詞を修飾する

- (6) The earlier we leave, the sooner we will arrive.
- (7) The longer he waited, the more impatient he became.

副詞は先頭に移動するがSV以下の語順が変わらないので, このパターンが生徒には一番わかりやすい。(6)(7)では, それぞれ earlier と longer という副詞が動詞を修飾している。

### パターン4 比較級が副詞で形容詞を修飾する

- (8) The more you lie, the less likely you are to be believed.
- (9) The higher the price, the more reliable the product.
- (10) The more money he makes, the more useless things he buys.

意味を優先させれば be likely to はまとまりで助動詞と考えた方が理解はしやすいが, likely は形容詞であり, 形の上では you are likely を SVC とみなすことはできる。そうすれば, (8)のような例はパターン4に当てはまる。

副詞が形容詞を修飾するとき, 「副詞+形容詞」は, まとまりとしては形容詞の働きをするので, パターン1の「形容詞が補語になる場合」, パターン2の「形容詞が名詞を修飾する場合」を考えてみればよい(「副詞+形容詞+名詞」のまとまりは主語・

目的語・補語になる)。(8)(9)は「副詞+形容詞(less likely と more reliable)」のまとまりが補語, (10)は「副詞+形容詞+名詞(more useless things)」のまとまりが動詞の目的語になった例。(9)の文では, 従属節・主節ともに be 動詞が省略されている。

### パターン5 比較級が副詞で副詞を修飾する

- (11) The more magnified the photograph was, the more clearly we could see the outlines of the city.

「副詞+副詞」はまとまりとしては副詞なので, 動詞を修飾する, 形容詞を修飾する, 副詞を修飾する場合に分けて考える。(11)は「副詞+副詞(more clearly)」のまとまりが動詞を修飾する例。

こうして文字だけに頼った解説だと複雑に思えるかもしれないが, 教室で黒板を使ってどの語がどの語を修飾するのかを色チョークで視覚的に示し, 生徒が理解しているかを確認しながらゆっくり説明すれば, 平均的な学力の生徒でも十分についていける。

品詞と型を重視したこのような説明の最大の長所は, 汎用性が極めて高い点にある。準動詞・関係詞・従属接続詞などは, 名詞・形容詞・副詞という枠組みで考えられるので(動名詞は Ving ~ の名詞的用法, 分詞構文は副詞的用法, 関係詞がまとめるのは形容詞節といった具合に), 今までの解説で使われた考え方は他の文法項目を学ぶ際にも広く応用できる。最近の中高生は「品詞」に対する意識が極めて低い。そのため, フィーリングでなんとなく英文を読み, なんとなく英文を作ってしまう。しかし, どの語にも品詞があり, 品詞によって文中の働きが異なるのだから, 丁寧に教えたほうが結局学習効率は上がる。

### 例2 Do you know who he is? と Who do you think he is? の違い

前者の例は特に問題ない。Who is he? は疑問詞を含む疑問文, who he is は疑問詞がまとめる名詞節だという点を確認すれば, ほとんどの生徒が理解できる。厄介なのが後者の英文。多くの文法書が「do you think が挿入的に使われていて, この後はSV ~ の語順になる」という説明をしている。生徒は本当にこれで理解できるだろうか。よく見かけるこの説明について考えてみる。

第1の問題は do you think を「挿入」とみなすのが妥当かどうかという点である。国語辞典によれば「挿入」は「間に差し入れる」という意味であり、それならば、挿入された部分を削除すれば完全な形の文が残らなければならない。文法書の「挿入」という項目にある例文(12)(13)から挿入句を削除すると実際そうなる。

(12) The concert was, in the end, called off.

(13) This experiment, I'm afraid, is a failure.

しかし、Who do you think he is? から do you think を削除すると \*Who he is? という非文が残ってしまう。説明に一貫性がなくなるが、例外なのだろうか。

第2の問題は「(do you think の後が)SV ~の語順になる」という箇所。どの文法書も、その理由については触れていない。慣用表現は理屈抜きで覚えてしまえばいいものも多いが、上記の英文で is he ではなく he is である理由は簡単に説明できる。

まず、例2の英文はどちらも元は以下のような構造をしていると考える。

(14) you know he is my brother  
           think  
       S      V          O

今、下線部がわからないのでこの部分を who で尋ねる。疑問詞は原則として節または文の先頭に移動しなければならない。疑問文には yes か no で答える yes-no questions と、それでは答えられない wh-questions があり、前者は Be S ~? または Do(es) SV ~? 後者は Wh- be S? または Wh-do(es) SV? という形をとる。(14)で who は節の頭に移動するが、「あなたは彼がだれなのか知っていますか」という文は yes-no questions なのでこの位置に留まり、ここで文を疑問形にする。主語は you、動詞は know、目的語は who he is という名詞節。「あなたは彼がだれだと思いますか」は wh-questions なので who は文頭に再移動する(この位置に留まると yes-no questions になってしまう)。この段階で疑問形にするが、主語が you、動詞が think、目的語が (who は文頭に再移動するにせよ) who he is であることに変わりはない。

このように考えれば do you think が挿入でない

ことも、is he ではなく he is である理由もきれいに説明できる(名詞節だから he is の語順)。「挿入的に do you think が使われていて、この後はSVの語順になる」という説明よりも一貫性がありわかりやすい。ここまで教えれば、多少理解力の高い生徒なら「彼が私を何歳だと思っているのかあなたは知っていますか(Do you know how old he thinks I am?)」という英文を自分の力で作れるようになる。説明をせず言語活動をさせるだけで、このような応用力・創造力は当然身につかない。

この他にも、簡単な規則を組み合わせるだけで説明できる表現・項目は無数にある。文法を教えるか否かよりも、いかにわかりやすく教えるかを教師同士が議論し、その成果を生徒に伝える方がはるかに生産的だろう。高校生にもなれば、抽象的な思考力や分析能力が十分に発達する。それならば、論理的な説明を用いて演繹的に教える方が効率的ではないだろうか。もちろん、外国語学習に「慣れ」や「理屈抜きの練習」も必要なことは言うまでもないが、

#### 4. まとめ

わけがわからないまま丸暗記した表現がどうして日本語訳のように解釈できるのかを理解したとき、そして、理解した規則が他の表現にも広く応用できることを知ったとき、生徒は目を輝かせる。彼らを英語学習へと駆り立てるのは、表面的な言語使用ではなく、さらなる飛躍を確信させる、正確で深い知識のほず。高校時代に基礎をおろそかにしては、社会に出て使えるコミュニケーション能力はなかなか身につかない。文法がわからないと悩んでいる生徒のためにも、もっと文法指導に焦点が当たり、教え方に関する議論が活発になることを切に願う。徹底した文法学習は、使える英語力を習得するための最初の一步である点を誤解してはならない。

#### 参考文献

寺島隆吉(2009).『英語教育が亡びるとき―「英語で授業」のイデオロギー―』。東京：明石書店。

(浜松学芸中学校・高等学校教諭)